



きずな



発行元：四国中央市人権教育協議会 〒799-0497 四国中央市三島宮川4-6-55
電話：0896-28-6028 E-mail:jinkyo@city.shikokuchuo.ehime.jp

人権ポスター

作 南小学校 4年松組 つくだ あいく 津久田 愛来 さん



作者からのメッセージ

道徳の授業で、基本的人権の話を書きました。人が生まれながらにもっている権利のことだそう。人権を大切にすることは、自分のことも相手のことも大切にすることだと教わりました。私は友達のことを大好きです。みんなで鬼ごっこをするのが大好きです。学級遊びで全員でドッジボールをするのが大好きです。私は、そんな大好きな友達のことをこれからもずっと大切にしたいです。

人権教育講演会(社会教育部)

日時：令和4年1月20日(木)19時開演
場所：しこちゅ〜ホール 大ホール
内容：虐待によって命を落としかけた私が、



講師：しまだ たえこ 島田 妙子 さん
演題：虐待の淵を生き抜いて
～人にも自分にもあたらない社会をめざして～
※参加希望の方は、上記までご連絡ください。

自分も子育てをする中で孤独感や不安感から嫌な感情をむき出しにしてしまったことがありました。大人でも、「そんなつもりじゃない」感情を出してしまうのはごくごく自然なこと「誰か、うちのお父ちゃんの心助けたって・・・」子どもの頃、ずっとこう思っていました。人は心の中がいっぱいいっぱいになると自分でも想像できない感情を出してしまうことがあります。感情はクセになっていだけ・・・通報する前にできることが沢山あります。

今月の主な記事

- 1ページ 人権ポスター
- 2～3ページ ～人権についての市民意識調査からⅡ～
- 4ページ 人権作文・編集室から

人権作文

「学び」のその先へ

土居中学校 三年 高橋 美咲

「正しい知識を身に付けよう。」
小学生のころから続いてきた人権・同和教育で私が一番心掛けていたことだ。差別の恐ろしさや、どれだけ間違っていることなのかを知らず、絶対差別をしない、許さない人間になれる。そう思っていた。三年生になって学習し始めた資料『峠』、結婚差別解消に向けての学習の中で、今までの自分の考えが、ただの思い込みであると言ったことが分かった。『峠』に出てくる母親と父親は、「差別はいけない、してはならない」と分かった上で差別をしていた。差別がしてはならないことだと分かっているなら、その恐ろしさも学んでいるはずなのに。知っているはずなのに。なぜ。私の中でそんな疑問がふくれあがっていった。

「なんで母親と父親は差別をしては行けないと分かっている、差別をしてしまったらどう？」家に帰ってそう母に聞いてみることにした。すると母は、あまり悩む様子もなくすぐに答えてくれた。
「それが人間の弱い部分なんだよ。」
そして、母が実際に体験した差別について教えてくれた。

母も学生時代、『峠』のような結婚差別に悩む友人がいたという。両親に結婚を反対されていた。母はそんな差別が許せず、友人の両親に電話で許してもらおうように伝えたそう。しかし、電話も聞き入れられず、その友人は両親とは離れて結婚した。
「二人で幸せだからそれでいいの...。」
と、友人は言っていたそうだが、母はそれが本心ではないと思っている。

「何もできない自分の無力さが辛かった。」
と話してくれた。二十年たっても忘れられない、母の中で大きなできごとだと教えてくれた。
「なんで両親は結婚を素直に祝福できなかったんだと思う。」という質問に、『峠』に出てきた、「妹の幸せを奪う権利はない。いとこたちまで、これからの結婚で肩身の狭い思いをしていくんだ。」親として、娘を苦勞の淵に追いやることはできないんです。」という言葉を思い出した。

「何か、差別と関わりたくないって感じがするよね。妹が、いとこが、娘がって言っているけれど、結局自分が差別されるのが怖いってこと。」
母はうなずきながら答えてくれた。
「たぶんそうだよ。差別の恐ろしさを知っているからこそ、自分は関わりたくない、差別されたくないって自己防衛だよ。それが人間の弱い部分だよ。」

「差別はいけないんだと学んで、知ったからといって、差別はなくならないし、反差別の人間になれたわけでもないんだね。」
「知ったことをどう行動に移せるかだよ。まだまだ差別という形のないものに惑わされている人がたくさんいるだろうからね。」
次の学校の授業で、担任の先生が人間の弱さについて「学んだ後が大切だ」と語ってくれた。
差別は形のない、目に見えないものだから、反差別の思いを「知識」としても持っているだけでは不十分だ。知識を付けた私たちが今、しなければならぬのは「行動すること、思いを伝えること。人権・同和教育参観日や人権劇、啓発活動など、私たちは伝える活動をたくさんしてきた。でもそれはゴールではない。実際差別と出会ったとき、本当に行動できるだろうか。少し不安に思ったが、私には九年間学んできた知識と、共に学んだ仲間がいる。中学校を卒業しても、学び機会が少なくなっても、私は差別に立ち向かうことを止めない。止めてはならない。これからは、「正しい知識を持って自分から行動する。」と心掛けようと思つた。

編集室から

数年前より手に力が入りにくくなり、物を受け取る時落としてしまうことが多くなった。

ある時、職場で物を受け取る時落としてしまいその状況を見ていた同僚が「若いのに...」と言いながら小さく笑った。いやいやそこは笑わないでよと悲しい気持ちになり、神経系から手に力が入りにくくなり落としてしまうことを話した。同僚は「知らなくて、ごめなさい」と言ってくれた。

ある買い物に行った時、釣銭を受け取ろうとした時、手の平にのせてくれたが力が入らず落としてしまった。すぐさま店員さんは「大丈夫ですか」と声を掛けてくれ、後ろに並んでいた人が拾って渡してくれた。店員さんの自然にでた言葉、見ず知らずの人からの行動に嬉しく温かさを感じた。

接し方により、相手が嬉しいと思ったり、嫌な思いをしったりと様々である。人と関わる時、何も知らないことで相手を知らず知らずのうちに傷つけてしまう可能性もある。いろんな場面において、自分に置き換えて考えたり、さりげなく言葉をかけたりできる自分でありたい。

(Y.M)

家族で回覧して下さい